

令和5年 神奈川県広報コンクール最優秀作品の概要

1 【広報紙・市部】 小田原市「広報小田原」（11月1日号）



【主たる記事の掲載意図】

近年、子育てに対して、「大変」「お金がかかる」といったネガティブな印象が見受けられます。

本紙では、特集号として「子育て」を取り上げ、ポジティブな印象を持ってもらえるよう、市が地域と共に子どもたちの「笑顔」のためにさまざまなことに取り組んでいる内容を、市と共に取り組みを行っている医師や地域の方の子どもたちや家族などへの想いなどのインタビューを交えて紹介しています。

【講評】

子育てというテーマは自体はオーソドックスですが産後ケアという切り口が良く、地域で受けられるサービスなどが、利用者の声とともに分かりやすく特集されていて評価できます。この町なら安心して子育てできそうだという安心感が紙面からにじみ出ている印象です。

また、「笑顔」というキーワードで様々な話題を結びつけ、デザインの力でまとめている点がユニークで、読んでいて心地よく感じました。文章も読みやすく、デザインもトンマナが揃い、余白も十分とられて、非常に見やすかったです。また、各記事に担当部署名が記載されていて、市民に嬉しい心遣いも好印象です。



2 【広報紙・町村部】 開成町「広報かいせい」（12月1日号）



広報かいせい

2023

12

田舎モダン



開成町
kaisei town

No.645



【主たる記事の掲載意図】

本紙では「地域支えあい活動」をテーマに企画面を構成しました。

開成町では、行政主体で住民の方々を見守るだけでなく、地域全体が「ご近所同士で気にかけて関係」を構築し、生活支援できる関係をめざしています。本紙の特集では、高齢になっても安心して暮らしていける地域づくりのための取り組みについて紹介しています。

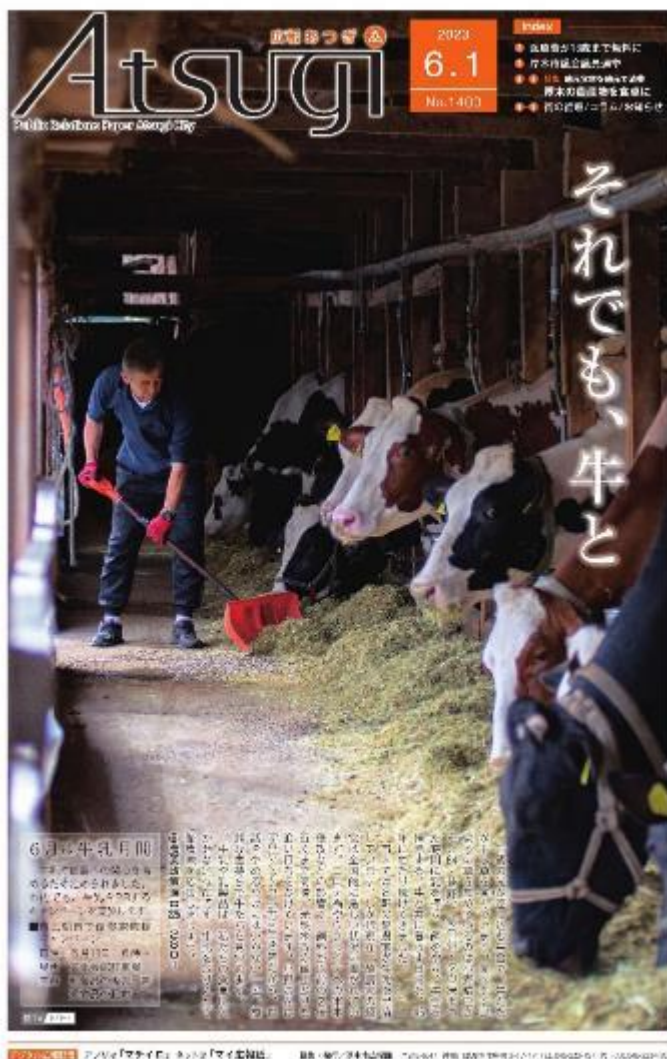
地域支えあい活動の概要及び開成町がめざす地域づくりや、実際に地域支えあい活動に取り組む地域住民の団体、支えあい協力店を取材し、活動の周知と利用促進につなげています。また、社会福祉協議会による生活支援コーディネーターの活動を紹介します。

【講評】

「おたがいさまの地域づくり」というテーマ設定が非常に良いです。4つの軸で地域交流のあり方を提示しているのも、非常に分かりやすく、理念だけで終わらず、具体的に地域で動くための情報まで丁寧に提供されている点も評価できます。文章も読みやすく、ほどよく町の人たちが登場し、写真の使い方も効果的でした。

余白を十分に取り、配色もやさしく、デザイン全体のクオリティが高く、安心感をしっかり伝えています。また、キャラクターのあじさいちゃんをうまく紙面に登場させ、きちんとブランディングしています。広報紙でこれだけうまく活用していると、リアルイベントなどでも認知度があり、活躍してくれるのではないのでしょうか。

3 【広報写真（一枚写真）】 厚木市「広報あつぎ」（6月1日号）



【掲載意図】

厚木市内では、8軒が酪農を営んでいるが、年々減少が続いています。こうした状況の中、ウクライナへの軍事侵攻などの影響で飼料は以前の2倍近くに高騰し、光熱水費も上がるなど、厳しい経営状況に置かれています。

本紙では、酪農家を応援するため、乳製品の消費を促すキャンペーンを実施する際に、その告知に合わせ市内の酪農家にスポットを当てた紙面を企画しました。

写真は、丹精をこめて育てている牛への餌やりの風景を写し、どんなに厳しい状況でも毎日、一頭一頭の命と真摯に向き合っている様子を伝えられるよう意識しました。長年使われてきた牛舎の雰囲気と、黙々と働く酪農家、穏やかな表情で餌を食む牛たちの姿から読者に日常を伝え、市内の酪農に関心が高まるような紙面を目指しました。

【講評】

自然光を生かして撮影しており、撮影技術が評価できます。牛舎という泥臭く映りがちな被写地において、働き手も複数の牛たちも、優しく美しく浮き上がっているように見えます。なぜこの写真を撮ったかを理解するには本文を読む必要があるのですが、「それでも、牛と」という引っ掛かり感のあるコピーが、本文に誘う入り口として機能しています。

4 【広報写真（組み写真）】 大磯町「広報おおいそ」（9月1日号）



【掲載意図】

大磯町内に2校ある町立小学校（大磯小学校、国府小学校）の開校150周年の特集記事に合わせ、両校の在校生の協力のもと、各校の黒板に装飾を施し、それぞれの写真を組み合わせることで1枚の写真が完成するよう作成しました。

当町の広報紙は、A4判、中折り、綴じなしの仕様で作成していることから、特集ページを2ページ及び19ページに配置、1ページ及び20ページ（表紙・裏表紙）をダブルカバーにすることで、当該ページを独立させることができるよう工夫し、より多くの町民に特集内容を発信できるよう、レイアウトの観点からも工夫しました。

また、特集記事では、開校150周年を記念としたイベントの開催情報を掲載するとともに、両校の歴史や両校の在校生及び幅広い年代の卒業生の皆さんから、当時の思い出を振り返っていただき、町全体で開校150周年を盛り上げていく内容の記事を作成し掲載しました。

【講評】

デジタル全盛時代を逆手に取ったアイデアの勝利と言えるかもしれません。黒板という、絶対に移動不可能なものを媒介に、そこに書かれるチョーク文字の色味に至るまでシンクロさせることで、「二つの学校だけれど、開校150周年を祝う気持ちは一つ」というメッセージが120%伝わってきます。この記事を読んだ町民には、心からの“おめでとう”が込み上げるでしょうし、被写体となった生徒たちにとっては、一生モノの記念になったことでしょう。

5 【映像】 愛川町「みんな共生はあたりまえ 中津小学校の多文化共生」



【主な内容・あらすじ】

神奈川県内陸工業団地のある愛川町中津地区の小学校では国籍にかかわらず、父母の両方またはそのどちらかが外国の出身者である、「外国につながるあるこども」が増えています。そうした子どもたちと、どう学校は向き合っているのか。町内の小学校の中で、外国につながるある児童が特に多い中津小学校取材しました。

【制作意図】

愛川町では、外国籍住民の人口比率が県内トップです。町内には43の国や地域出身の方々が暮らしており、共生に向けたさまざまな取り組みが行われています。しかし、日常生活レベルではお互いに交流は少なく、本町の多文化共生は発展途上にあります。そんな中、全校児童の26%以上が外国につながりを持つ中津小学校の子どもたちは、大人も感心するほど多文化を当たり前のように入れています。町の多文化共生のリアル、そして自然に共生する子どもたちの姿にきっと大人も何か感じるのではと思いこの動画を作成しました。



【講評】

多文化共生の推進という当該地域のみならず広く全国民にとって喫緊の課題に光を当てている点を高く評価しました。町の多文化共生の現状をよく表現しています。

また、登場人物の教頭先生の説明もわかりやすいと思います。外国にルーツをもつ児童や現場の担当者など直接の「当事者」が登場し、自分の言葉で語るシーンがあれば受け手はさらに巻き込まれたと思います。